Faculty Development

自主創造 日本大学

日本大学 FD NEWSLETTER

AUTUMN 2013 VOL 04

Contents

学生による授業評価をFD活動に生かすために 2
「平成24年度全学FDシンポジウム」開催

連載 部科校における学習支援等の事例紹介 3
第3回 **［生物資源科学部］キャリアイングリッシュ講座で使える英語力アップ**

連載 授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供
第4回 **総合社会情報研究科における学習支援と指導改善に向けての取り組み**

TOPICS 01 **「平成24年度 学生と教職員によるFD座談会」開催** 4

TOPICS 02 **全学FD活動の実態調査結果を公開**

COVER PHOTO

文理学部学生FDワーキンググループ企画，学生主体型授業「これから『日本の将来』の話をしよう」でディベートに取り組む学生たち。

学生による授業評価をFD活動に生かすために

「平成24年度全学FDシンポジウム」開催

平成 25 年 2 月 26 日，日本大学会館大講堂において「平成 24 年度全学ＦＤシンポジウム」が開催され，学生による授業評価アンケートの活用方法に関する講演やミニワークショップが行われました。

今回のシンポジウムは，「学生のＦＤ活動への参画」をうたいながらも，各学部等が実施している学生授業評価アンケートが十分に生かされていない現状を打開するために行われました。開会挨拶では，牧村正治ＦＤ推進センター長が，「全学的なＦＤ活動を推進するためにも，各学部・研究領域の特性を踏まえながら学生による授業評価アンケートの効果的な活用法について考えてもらいたい」と述べました。

◎授業評価の目的を明確化すべき

第一部では，立命館大学教育開発推進機構教育開発支援センター副センター長の安岡高志教授を迎え，教授の長年にわたる授業評価研究の実証的データを交えながら，「学生授業評価の読み方と授業への活用」という演題で講演を行っていただきました。

安岡教授は，「受講者数 30 名以下の授業では，学生の授業評価が高い傾向」など，学生授業評価の特徴を説明した。

まず，安岡教授は，学生による授業評価がどのような性質を持っているかを解説。その上で，「『学生による評価は信頼できない』と考える教員もいると思うが，学生による教員評価と教員による他の教員評価を比較すると，双方の数値はほぼ一致していることが多い。学生授業評価が意味あるものだと学生と教職員の双方が考え，両者が共同して努力すれば，授業改善が進んでいくはず」と指摘しました。

その後，学生の授業評価を高めるためには，具体的にどんな手立てが有効か，以前，所属していた東海大学の優秀教員へのインタビュー調査を通して浮かび上がってきた授業展開のポイントを紹介していただきました。

最後に，安岡教授は「ザ･リッツ･カールトンやスターバックスが成功した理由には，自分たちの存在価値を明確にして，全社員に浸透させたことが根底にある。大学も同様に，自らの存在価値をはっきり打ち出し，学生授業評価の目的を明確にして授業改善を行えば，さらに発展していく。学生授業評価を単に授業改善を行うだけのツールとして使うのではなく，理想の大学に近づくためのツールとしてもぜひ活用してもらいたい。それが，本当の意味での活用につながる」と強調されました。

◎学生授業評価の活用を体験

第二部では，愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長の佐藤浩章准教授を迎え，「効果的な授業アンケートの活用方法」をテーマに，講演およびミニワークショップを行っていただきました。前半は，アメリカや日本における授業評価アンケートの歴史，意義や特徴について説明がありました。さらに，効果的に活用するための実施方法，回収・集計・返却のプロセス，学生や教員へのフィードバックについて，愛媛大学の事例などを交えながら紹介していただきました。

佐藤准教授は，「多くの大学の学生授業評価は，教員の指導力に焦点を当てた質問項目が多い。本来は，大学の教育観や哲学に基づき，各授業で『学生の学びを促せたかどうか』を問うべきだと考える。そうした観点から，設問項目を見直すことが大切だ」と述べました。

後半はミニワークショップを実施。教職員が隣同士でペアになり，自身の授業評価アンケートの結果を分析し合いました。その上で，自分の所属する学部等の学生授業評価の改善点などについて意見交換をし，学生授業評価の活用に関する理解を深めました。また，佐藤准教授から学生授業評価を授業コンサルティング，カリキュラムマネジメントや教員評価などに役立てるための手法についても説明していただきました。

愛媛大学の佐藤准教授の講演では，学生授業評価の自由記述欄を授業改善の資料として活用している様子も紹介された。

第一部，第二部とも講演終了後には教職員から具体的な活用に関する質問が相次ぎ，関心の高さがうかがえました。最後に，全学ＦＤ委員会プログラムワーキンググループメンバーの葛西一貴教授（松戸歯学部）から，安岡教授，佐藤准教授に対する謝辞と，「学生授業評価アンケートを活用し，学生参加型の FD 活動を進めていきたい」との閉会挨拶があり，盛況のうちにシンポジウムは閉幕しました。

全部科校から教職員 151 名が参加。ミニワークショップを行うことを考慮し，座席は所属が異なる教職員が隣り合わせになった。

連載 部科校における学習支援等の事例紹介

第3回［生物資源科学部］キャリアイングリッシュ講座で使える英語力アップ

生物資源科学部では，平成15年度から，学生の英会話力を磨くために，キャリアイングリッシュ講座を開いています。講師は，英語を母国語としない人に対する英語教授法を学んだ英米５人のネイティブスピーカー。１回40分のレッスンが，週５日，年間約100回設けられ，学生は授業の空き時間などに受講できます。３つのレベルに分かれ，１クラスの最大人数は12人。講師と学生，学生同士で話すことにより，さまざまな表現を実践的に学び合えます。本年度の受講生は270人です。

上級コースのレッスン。この回のテーマは「さまざまな仕事について話す」。

１年次から受講している鶴巻直哉さん（食品ビジネス学科３年）は，「表現が思いつかなくても，先生は答えを言わない。違う言い回しに変えて，あくまでも自分が発言できるようにしてくれる。受け身ではなく，能動的なレッスンは楽しい。自然と英語が話せるようになり，向上が体感できる。アウトプットする機会が毎日あるのも魅力」という理由で３年間続けているそうです。

左／鶴巻直哉さん（食品ビジネス学科３年），
右／金山喜一教授（獣医学科）

生物資源科学部FD委員会副委員長の金山喜一教授（獣医学科）は，「週２コマの正課の授業では，英語力の向上は難しい。学内留学ともいえる環境を整え，英語コミュニケーション力の向上を支援している。英語を手段として社会で活躍する人が育ってほしい」と期待しています。

連載 授業改善のための ティーチングティップスの収集と情報提供

第4回 総合社会情報研究科における学習支援と指導改善に向けての取り組み

通信制大学院の総合社会情報研究科（GSSC）は，平成 25 年度，学生有志が新入生支援として２回の学習相談を実施。教員・職員・学生による三位一体の FD 活動を試み，情報共有による指導改善の方向性を確認しました。

第１回は，新入生の不安や疑問を早期に解決し，論文作成に集中できるようにと，４月のパソコン研修時に実施。第２回は，５月の博士後期課程研究発表会後に，教員，修了生，在校生による鼎談を行いました。

学習相談で，新入生は，論文の作成方法，教材や資料の入手範囲，先行研究の検索，教員との意思疎通など，さまざまな情報を求めていることがわかりました。当日は，教員や図書館司書の修了生らが丁寧に回答し，新入生の不安を解消。相談員として参加した在校生にとっても，修士論文作成に役立つ情報が得られました。

課題は，このような情報をどう共有し，学習支援と指導を通信制でどのように実現するかです。GSSC では，研究科のホームページ，同窓会のホームページやデータベースなどに，学習支援や研究指導に関する情報を集約・共有し，学生や教職員がアクセスして更新・同期化する環境が整いつつあります。現在は，最新技術を駆使したアーカイブ化の具体策を検討しています。

（国際情報専攻 12 期生／学習相談プロジェクト・リーダー 西山友紀子，総合社会情報研究科教授 松岡直美）

左／松岡直美教授（総合社会情報研究科），
右／西山友紀子さん（国際情報専攻）

TOPICS //// 「平成24年度 学生と教職員によるFD座談会」開催 01

平成 25 年 2 月 26 日，日本大学会館において，学生と教職員によるＦＤ座談会が開かれました。テーマは「良い授業とは」。学生８名と全学ＦＤ委員会プログラムワーキンググループ（WG）の教職員９名とで意見交換がなされました。

座談会では，学生と教職員のそれぞれが考える「良い授業」について意見を述べ合い，両者の意識共有を目指しました。

参加学生は，これまでに受けた魅力的な授業などについて積極的に発言。

参加学生が考える「良い授業」としては，「学生の興味を引き付ける授業」「教科書以外の内容を聴くことができる授業」「問題解決型の授業」などの声が寄せられました。

これに対して，教員からは「教育者が一方的に進める授業ではなく，学生が学びの主体である授業を理想としている。どのような授業であれば学生は意欲的に取り組みたくなるのか」という質問がありました。

学生の意見で多かったのは，少人数制授業やディスカッション形式の授業。文理学部学生 FDWG が企画したディスカッション形式の授業が開講することも話題に上がりました。

２時間かけ，事例紹介（教員・学生）と意見交換を行った。

ファシリテーターを務めた短期大学部（船橋校舎）の畠沢政保教授は，「『良い授業』を作るためには，参加学生全員の前向きな姿勢と教職員の努力，双方の力が必要」と指摘。授業アンケートなどを活用することで，学生と教職員が共に改善点を認識し合い「良い授業」を作っていくことが，今後の課題として挙げられました。

TOPICS //// 全学FD活動の実態調査結果を公開 02

平成 24 年度に，全国の国公私立大学 230 校と本学の 40 の部科校を対象に行った，「FD 等教育開発推進関連組織に関する調査」結果が公開されています。

本調査は，FD 活動が教育改善という本来の役割を果たしているかどうか，また，大学として統一された FD 活動の推進を見るための組織体制と，各部科校の連携の在り方に関して示唆を得ることを主な目的として実施しました。

アンケート調査およびヒアリング調査を行った結果，まず，実効性を伴う FD 活動には大学の組織力が重要であり，教員がその組織のリーダーを果たすべきであること，次に，組織を設置するだけでは不十分であり，全学的な取り組みの推進と教員の理解向上が一層望まれることが明らかになりました。さらに，大学として統一された FD 活動の推進のためには，全学的な活動と各部科校での活動において明確な役割分担が行われ，運営組織が有機的に連携されることが極めて重要であることも判明しました。

調査報告書は学内情報共有システム「事務の友」に，概要は『日本大学 FD 研究』（第 1 号）に研究ノートとして公開しています。各部科校における FD 活動の計画・推進に是非お役立てください。

（全学FD委員会調査・分析WGリーダー　辻忠博）

図1 FD推進の主な目的

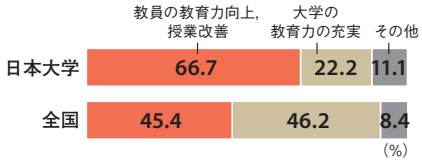
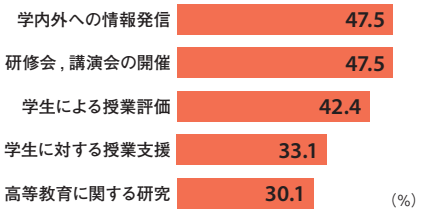


図2 全学的な FD 推進組織の業務内容



※複数回答可。数値は有効回答数に対する割合。

図1，2とも「FD 等教育開発推進関連組織に関する調査」より。

※本ニューズレターに記載した役職・資格，学年等は，記事内容実施時現在のものです。

日本大学 FD NEWSLETTER 第4号
発　行　日：平成25(2013)年9月1日〔年2回(4月，9月)発行〕
発　行　者：日本大学FD推進センター センター長 牧村正治
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24　電話:03-5275-8314 FAX:03-5275-8315
e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp　http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-center/
所 管 部 署：日本大学 本部 学務部教育推進課
企画・編集：日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

「日本大学 FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら，学務部教育推進課（adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp）へお寄せください。

本ニューズレターに掲載した文章，写真等の無断転載・複製を禁じます。 Copyright(C)Nihon University 2013 All Rights Reserved.

自主創造 日本大学